

## 確かな学力を形成する生活科の実践課題

－ 他教科との関連と接続を中心に －

竹内 元\*・福山聡恵\*\*・高橋京子\*\*\*

Perspective of Education for Life Environment

Gen TAKEUCHI\*・Satoe FUKUYAMA\*\*・Kyoko TAKAHASHI\*\*\*

### 1. はじめに

生活科は、具体的な活動や体験が目標であり、内容であり、方法であるという点、学習対象である身近な人々や社会、自然を一体的に扱うという点、話す・書く・歌う・作るなど多様な活動が展開される点といった総合的な性格を教科の特性としてもつことから、国語科、音楽科、図画工作科など他教科との関連が深いとされている。また、気付きの質を高めることが科学的な見方や考え方の基礎を養うことに留意し、理科や社会との関連を意識した活動を取り入れることが課題とされている。さらに、生活科は、小学校低学年で幼児教育の成果を踏まえ小学校生活に適應することや、基本的な生活習慣等を育成しつつ教科等の学習活動に円滑な接続を図る中核教科として位置づいている。生活科の今日的課題として、国語科、音楽科、図画工作科といった低学年他教科との横の関連、理科・社会科との縦の関連や幼小連携を意識した学習に当たることが求められている。本稿では、生活科と他教科の関連と接続を整理し、実践課題を明らかにしたい。

### 2. 生活科と他教科の関連

生活科と他教科の関連については、新学習指導要領「生活科」の「指導計画の作成と内容の取り扱い」において、「指導計画作成の上の配慮事項」として、次のように記述されている。

(3) 国語、音楽科、図画工作科など他教科との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第一学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うことなどの工夫すること。

---

\* 宮崎大学大学院教育学研究科  
\*\* 宮崎大学教育文化学部附属小学校  
\*\*\* 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園

今回の改訂では、「積極的に」という文言と「特に、第一学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うことなどの工夫をすること」という内容が、新たに加えられた。

「積極的に」という文言が加えられ、これまで以上に他教科との関連を図ることが求められているのは、ゆとりある活動を展開するだけでなく、児童の意識に沿った充実した活動を展開し、学習意欲が高まることが期待されるからである。

ここでいう関連的な指導とは、複数の教科の目標や内容を組み合わせて学習活動を展開するのではなく、教科別に指導するに当たって、各教科等の関連を検討し、指導の時期や指導の方法について相互の関連を考慮して指導するものである。国語科、音楽科、図画工作科など他教科等の関連を図った指導の在り方は、2つある。生活科の学習成果を他教科等の学習に生かすことと他教科等の学習成果を生活科の学習に生かすことである。

生活科の内容には、他教科等へ発展する可能性をもっているものが多い。地域を探検し、発見した秘密を新聞に書き表したり、動物の世話で気付いたことを作文に書いたり、野菜の栽培でお世話になった方にお礼の手紙を書いたり、動物とのかかわりを絵で表したりなどである。新学習指導要領「生活科」解説では、国語科と音楽科との関連が想定されている。国語科との関連では、見たり、探したり、育てたり、作ったりしたことが、書こうとする題材に必要な事柄を集めること、事柄の順序に沿った簡単な構成を考えること、つながりのある文や文章を書くことなどへ発展することが考えられている。たとえば、生活科での学校探検において感動したことや、疑問に思ったことなどが国語科の題材ともなり、国語科で題材に必要な事柄を集めるために学校探検の活動を思い出しメモすることが行われるというのである。生活科の活動経験が、書くことの指導事項へつながるといっているのである。また、音楽科との関連では、身近な自然を観察したり身の回りのものを使って遊んだりすることが、歌詞の表す情景や気持ちを想像して歌うこと、音の面白さに気付いて音遊びをすることなどに発展することが考えられている。生活科の活動における人々や自然とのかかわりが、表現することへの有効な動機付けになり、国語科、音楽科、図画工作科などの学習活動につながっていくというのである。しかし、生活科の学習成果を他教科等の学習に生かすことは、生活科で活動して文を書けば国語科、絵を描けば図画工作、歌を歌えば音楽科になるというものではない。他教科の表現のために生活科の体験を位置づけるのでもなく、生活科における体験をただ他教科で表現するのでもない。文を書く、絵を描く、歌を歌うという活動を生活科と関連する他教科の内容ととらえるのは、間違いである。他教科において活動そのものは、教科目標でも指導事項でもない。生活科と他教科を必ず関連させなければならないというのではなく、他教科の目標を明確に意識しつつ、各教科の目標が生活科を中心とした一連の活動のどこに位置づき発展していくのかを計画すること

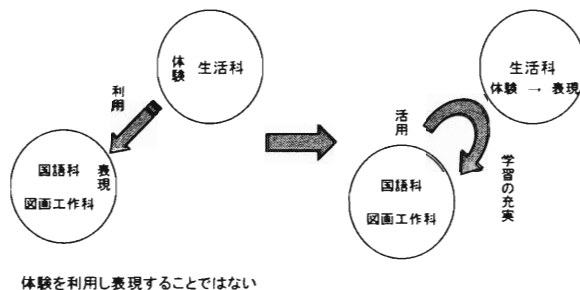


図 1

が求められてくる。生活科と他教科の違いを意識しつつ、体験と表現を一体的に捉えた重層的な活動が生まれてくる必要がある。(図1)

他方、他教科等の学習成果を生活科の学習に生かすとは、子どもたちが他教科において既に習得した知識、技能、能力等を適切に生かして生活科の活動を展開するというものである。新学習指導要領「生活科」解説では、国語科と図画工作科との関連が想定されている。たとえば、国語科では、相手に応じて話す事柄を順序立てて話すこと、互いの話を集中して聞き話題に沿って話し合うことなど能力を育てる。こうした学習の成果が、生活科における、生活の様子や地域の出来事を伝え合う活動において、発揮され、互いに交流する活動が充実していくと考えられている。話すこと・聞くことの指導事項を通して育てられる能力が生活科の活動を豊かにしつつ、子どもたちの能力をいっそう確かなものにしていくというのである。また、図画工作科では、絵や立体工作に表す活動を通して、身近な材料や扱いやすい用具を使うことができるようにする。図画工作科で十分に扱い慣れた土、粘土、木、紙、クレヨン、パス、はさみ、のり、簡単な小刀類などの用具は、生活科での遊びや遊びに使うものに工夫してつくる活動に生かされることが考えられている。ここで重要なのは、関連を図るということが生活科のために教科の学習を利用するというのではなく、それぞれの教科の学習をよりよいものにするという点である。生活科と他教科の関連は、一方が他方を補完する一方向的な関係ではない。他教科の学習成果を生活科の活動のなかで発揮することが、子どもたちの体験や気付きを豊かにするのかどうか。他教科の学習成果である子どもたちの技能や能力の応用範囲を生活科の活動が広げ、いっそう確かなものとして身につけていく機会となることができるのかどうか。生活科と他教科の関連は、学びにおける体験と表現の関係を相互に豊かにする活動として重層的な指導計画を求めている。(図2)

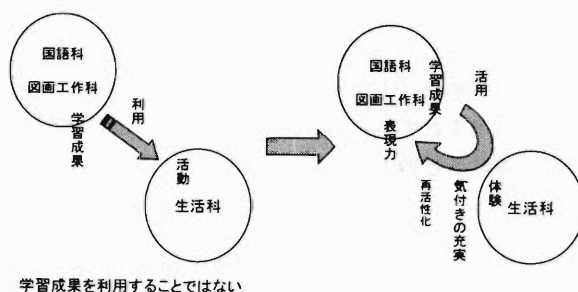


図2

### 3. 生活科と幼児教育との接続

生活科と他教科の関連は、教科の目標や内容の一部について、これを合科的に扱うことによって指導の効果を高めることも期待されている。単元または一コマの時間のなかで、複数の教科の目標や内容を組み合わせ、子どもたちが具体的・総合的に学習できるよう工夫するというのである。たとえば、子どもたちが生活科における活動を歌や踊り、劇によって表現する単元の展開が考えられている。生活科の活動を基に発表内容を創り上げる際に、国語科、音楽科、図画工作科、体育科等の目標も効果的に実現され、効率的な授業時数の活用を図ろうとするのである。

今回の改訂で加えられた「第一学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うことなどの工夫をすること」とは、こうした合科的な指導として想定されている。たとえば、4月の最初の単元では、学校を探検する生活科の学習活動を中核として、国語科、音楽科、図画工作科などの内容を合科的に扱い大きな単元を構成することが考えられ、こうした単元では、子どもたちが自らの思いや願いの実現に向けた活動を、ゆったりとした時間の中で進めていくことが可能となるとされている。総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校教育に生かすことが、小1プロブレムなどの問題を解決し、学校生活への適応を進めることになるものと期待されている。入学当初の生活科を中核とした合科的な指導は、幼児とふれ合う交流活動とともに、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらしてくれるというのである。なお、幼児とふれ合う交流活動は、子どもが自らの成長を実感できるよう低学年の児童が幼児と一緒に学習活動を行うことが配慮されたり、新一年生の体験入学の際に、児童が幼児と交流する学習活動を設定したりすることが想定されている。さらに、教師の相互交流を通じて、指導内容や指導方法に理解を深めることが幼小連携に求められている。

生活科における幼小連携は、学びの接続を求めている。生活科の学校探検の学習活動を中核として、国語科・音楽科・図画工作科等との合科的な学習を設定すれば十分なものではない。スタートカリキュラムは、教科の学習の切り替え時期を少しずらしただけのものではない。子どもたちの成長を連続したものととらえ、自立の基礎を学ぶという点で幼児教育の知見を取り入れつつ、柔軟に授業を組み立てなければならない。幼小連携においても、発表する立場と聞く立場、教える立場と教えられる立場、世話する者とされる者のような一方的な関係ではないと指摘されている。幼稚園では最上学年として責任をもって様々な経験をしてきたのに、小学校では一番小さいということで、赤ちゃん扱いされることもある。できるようになっていたこともさせてもらえなくなってしまうのである。小学生が教えてくれることであこがれたり、身近になったりするだけでなく、子どもたちの主体性や有能さが生かされるようにするにはどうすればいいか。子どもの願いや思いを生かし、子どもも教師も相互の主体性を生かすように指導性を考えていく必要が指摘されているのである。幼児教育や保育の知見に学びつつ、子どもの学習に対する教師の指導性をどのように発展させていくかが課題となる。

#### 4. 生活科と第3学年以上の学習との接続

第3学年以上の学習との接続は、2つの側面が想定されている。理科・社会との接続と総合的な学習の時間との接続である。

生活科の内容は、第3学年以上の理科と社会の内容を視野に入れ見直しが行われている。社会との接続では、「地域と生活」で、地域で働いている人を対象にすること、「公共物や公共施設の利用」で、公共物や公共施設を利用することが明確にされている。他方社会科では、「生活科の学習内容を踏まえ、児童の発達段階に応じて、地域社会や我が国の国土、歴史などに対する理解と愛情を深め、社会的な見方や考え方を養い、身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を養うことを重視して改善を図ること」が改善の具体的事項として示され、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習を一層充実させることにより、学習や生活の基盤となる知識・技能を習得させることが求められている。理科との接続では、「自然や物を使った遊び」で、自然の不思議さに気付くことが明示されている。

新学習指導要領「生活科」では「遊びに使うものを工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気づき」という文言が加えられた。自然の不思議さや面白さを実感するよう、遊びを工夫したり遊びに使うものを工夫して作ったりする学習活動が求められている。動くおもちゃを工夫して作って遊ぶ活動、ものを水に溶かして遊ぶ活動、風を使って遊ぶ活動などが想定され、科学的な見方・考え方の基礎を養うことが期待されている。他方理科では、生活科との関連を考慮し、ものづくりなどの科学的な体験や身近な自然を対象とした自然体験の充実が図られ、たとえば、第3学年の「風やゴムの働き」と「身近な自然の観察」で生活科との接続が想定されている。風で動くおもちゃやゴムで動くおもちゃをつくるものづくりの活動を通して、風を受けたときやゴムを働かせたときの手ごたえなどの体感を基にした活動を重視したり、理科の学習の基盤となる自然体験活動を充実するため、児童の野外での発見や気づきを学習に生かすような自然の観察を取り入れたりすることが求められている。そのさい、生活科は、身近な人々や社会及び自然に働きかけながら、自分にとっての意味を見出していく学習であり、理科や社会と生活科の違いを十分に理解する必要が指摘されている。生活科は、身近な環境の一部を対象化し客観的に理解することを求めるものではない。理科や社会科でも行われる活動は、類似・連続していても、学習は異なるのである。

総合的な学習の時間との接続は、生活科の発展として位置づけられている。生活科は、一人一人の思いや願いから主体的な活動に取り組み、自分自身や自分の生活について考える学習であり、総合的な学習の時間は、自ら課題を見付け、探究的な学習を通して、問題を解決する資質や能力を身に付け、自己の生き方を考える学習である。ともに自己認識や自己形成をねらいとし、総合的な学習の時間が求める資質や能力と生活科の学習で重視する資質や能力はつながっているというのである。生活科は、「探究」を中心にした総合的な学習の時間と同じような学習が求められ、総合的な学習の時間では生活科で身に付けた資質や能力が学習に生かされるように計画することが求められている。さらに、地域の人々の協力や地域の教材、学習環境の活用にあたっては、生活科の実践で作成した生活科マップや人材バンクなどのノウハウを生かして、総合的な学習の時間の学習に協力可能な人材や施設のリストを作成したり、地域の有識者との協議の場などを設けたりする工夫が考えられている。総合的な学習の時間の実現に向けて、生活科のしくみを生かそうとするのである。

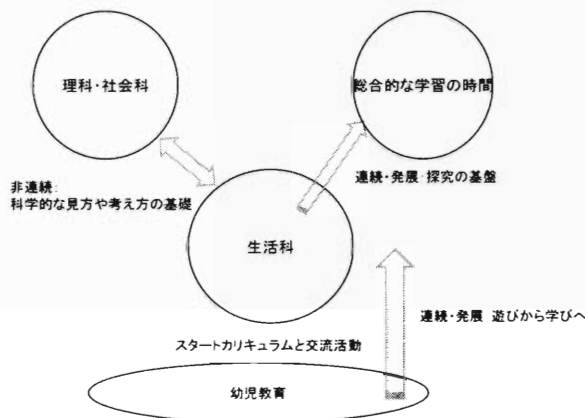


図 3

生活科と他教科の接続は、子どもの学習として連続・発展し、教師の指導性の違いを意識しつつ、どのように展開していくが課題となる。(図3)

## 5. おわりに

生活科と他教科の関連は、体験と表現の関係を豊かに展開していく活動を教科横断的に求めている。教科の特性を意識した指導性の違いを明確にしていくことが課題となっている。生活科と幼児教育の接続は、子どもの主体性や有能さを生かすカリキュラム構成と教師の指導性の展開を課題としている。生活科と他教科の接続は、子どもの学習活動が連続・発展する上で、どのような指導性の違いがあるのかを明らかにしていく必要がある。今後は、具体的な実践を通して、生活科と他教科の関連と接続を検討しつつ、生活科に求められる教師の指導性を明らかにしていきたい。

## 6. 参考文献

- 1) 寺尾慎一編著『平成20年改訂小学校教育課程講座生活』ぎょうせい、2008年。
- 2) 野田敦敬編著『小学校学習指導要領の解説と展開』教育出版、2008年。
- 3) 木村吉彦編著『小学校新学習指導要領の展開生活科編』明治図書、2008年。